

中谷先生について私が知っている二、三の事柄

とううら
東浦 弘樹

中谷拓士先生と初めてお会いしたのは（仏文専修ではお互いを「さん」づけで呼ぶ慣習がありますが、初めてお会いしたとき、私は大学院生、中谷先生は教授だったため、ふたりきりのときはずっと「中谷先生」で通しています。ですから、ここでもそれに従おうと思います）、私がフランスに留学する直前、1985年の夏だったと記憶しています。その日、私が指導教授の加藤林太郎先生（現・関西学院大学文学部名誉教授）と大学の正門に向かっていると、向こうから中谷先生が歩いて来られました。いいえ、そのとき私はまだ中谷先生を知らないのですから、この言い方は正確ではありません。そのときの私にとって先生はまだ見知らぬロマンスグレーの紳士にすぎなかったのですが、加藤先生とその紳士は旧知の間柄らしく、正門前の喫茶店「トップ」でお茶を飲むことになりました。

当時、中谷先生は商学部の教授で、秋から（ということは私と同じ時期に）留学を控えておいででした。私はフランス政府給費奨学金の試験に受かり留学が決まったものの、向こうにまったく知り合いはいませんでしたから、中谷先生の住所をうかがい、連絡を取りますと約束して別れました。とはいえ、先生の留学先はパリ、私の留学先はアミアンでしたし、一度会ったきりの先生に連絡を取るのはいささか気が引けたこともあり、実際にパリでお会いすることになったのは、翌年の3月でした。

先生が指定なさったサン＝ジェルマン・デプレの有名な喫茶店「カフェ・ドゥ・フロール」へ行く途中、私は地下鉄の通路で人とぶつかり、メガネを落として片方のレンズを割ってしまいました。アミアンの寮には替えのメガネがありますが、出先のパリでは急の間に合いません。私は「ど」がつく近眼ですか

ら、片方のレンズがないと危なくて仕方ないので、手元にあったガーゼ（なぜガーゼが手元にあったのかはよく覚えていません）をセロテープで割れたレンズのところに貼付けて、そのまま「カフェ・ドゥ・フロール」へ向かいました。先生は私の姿を見てさぞかし驚かれただろうと思いますが、事情を説明して、サンドウィッチとカフェ・オ・レをご馳走になりました。

その後、先生はすぐに帰国なさったため、フランスで再会する機会はありませんでしたが、私が留学から帰った翌年の1990年に先生から突然連絡があり、商学部でフランス語の非常勤講師の仕事をいただきました。おそらく加藤林太郎先生のご推薦があったからでしょうが、私としてはメガネにガーゼを貼付けた姿が印象的だったからではないかとひそかに思っています。そして、さらに次の年、商学部の専任講師の職につかせていただくことになりました。

当時の私はあちこちで衝突もしましたし、私自身まったく知らないところで誰かの機嫌を損ねるようなこともあったようです。先生はそんな私を陰で随分かばってくださいったのだと思います。ただ、よそからなにかを言われれば伝えないわけにはいきません。私は先生経由で随分いろいろなことを聞かされました。一時は中谷先生から電話をもらうと、「今度はなんだろう」と身構えるほどでした。ただ、そんなときでも先生は決して小言は言わず、私の話を聞いたうえで相談に乗ってくださいました。

先生が商学部から文学部に移られたのは1996年4月のことです。「移った」と書きましたが、関西学院大学は学部単位で動くことが多く、商学部と文学部はまったく別の組織です。教員が学部を変わることは極めて稀で、単なる配置転換ではなく、別の大学へ変わるようなものです。幸いにして中谷先生の後任として森本達夫さんというすばらしい先生をお迎えすることができましたが、それでも私としては一抹の寂しさは拭いきれませんでした。

私が文学部に移ったのはその6年後の2002年のことです。中谷先生によれば、決して先生が私を「呼んだ」わけではなく、「先生以外の仏文のメンバーの総意」だったとのことですが、いずれにせよ私は先生と再びご一緒する機会を得たわけですから（商学部にとってはいい迷惑だったかもしれません。その点に

については申し訳なく思っています。私は本心から、私を育ててくれたのは商学部だと思っています。だから、商学部に対しては深い愛着と感謝の念を抱いています。そして、それは中谷先生も同じではないかと思います）。

それから11年がたちました。思えば、私は大学の教員としての職歴の大半を中谷先生と一緒に過ごしてきたことになります。そしてそれは、あの夏の日、大学の正門のところで先生に偶然お会いしたこと、パリの「カフェ・ドゥ・フロール」でメガネにガーゼを貼付けたまま先生にお会いしたことのおかげではないかと思います。そう考えるならば、人の縁というのは不思議なものです。

すでに書きましたように、中谷先生は誰もが認めるロマンスグレーのダンディな紳士です。「ナイスミドル」ということばはもう死語かもしれませんが、そのことばを聞いて私が最初に思い浮かべるのは中谷先生の姿です。

中谷先生はまた大変な愛妻家です。あるときしみじみ奥さまのことを「妻というより戦友という気がする」とおっしゃっていたことがありました。早くに結婚され、奥さまと苦楽をともにされた中谷先生ならではのことばだと思います。またあるとき（これを言うと中谷先生はいやがるのですが）新入生のオリエンテーションで、当時文学部の専任講師だった博多かおるさんが「猫が好きだ」と言ったことがあり、それを受けて伊藤了子さんが「犬が好きだ」と言い、曽我祐典さん、オリヴィエ・ビルマンさん、私が「猫が好きだ」と言ったことがあります。最後に残った中谷先生は自分もなにか言わなければならないと考えて困りはてたのでしょう、「私は妻が好きだ」とおっしゃいました。先生自身は「あれはギャグのつもりだった」とおっしゃいますが、人間はとっさに本音をもらすもの——私はあれが先生の本音だったと信じています。

そんな中谷先生と奥さまの未来が平和と幸福に満ちていますよう心よりお祈りいたします。どうぞお幸せに。

（文学部教授）

付記

「中谷先生について私が知っている二、三の事柄」というこの小文のタイトルは、勿論ジャン=リュック・ゴダールの「彼女について私が知っている二、三の事柄」(*Deux ou trois choses que je sais d'elle*) のもじりです。定年退職なさる先生の門出をお祝する文にふざけたタイトルをつけるなという意見もあるでしょうが、私が知る中谷先生は寛大でユーモアに満ちた方ですので、きっとお許しいただけるものと信じます。